

鹿児島県与論島から採集されたソリハシコモンエビ *Urocaridella* sp.

岩坪洗樹

〒 890-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20 鹿児島大学水産学研究所

■ はじめに

ソリハシコモンエビ *Urocaridella* sp. はサンゴ礁の岩のくぼみや洞穴の中などに生息し、そこに来る魚類の口、鰓腔内、および体表などに付いた寄生虫を食べる、魚類のクリーニングを行うことが知られている(亀崎ら, 1988; 峯水, 2000; 加藤・奥野, 2001)。クリーニングは夜間に活発に行われるが、日中でも行われる(加藤・奥野, 2001)。また、夜間は波打ち際付近まで遊泳してくることがある(峯水, 2000)。

2012年10月22日に鹿児島県与論島茶花港でソリハシコモンエビ1標本が得られた。本調査で得られたソリハシコモンエビは、標本に基づく鹿児島県からの初記録となる。さらに、ソリハシコモンエビは水中写真に基づく記録やダイバーによる観察例が多く報告されているが(亀崎ら, 1988; 奥野, 1994; 加藤・奥野, 2001)、標本に基づく日本国内からの記録は、これまでに奥野(1994)による八丈島産の標本のみである。よって、今後の分類学的研究や生物地理学的研究などに寄与するために、この標本を記載し報告する。

■ 材料と方法

標本の計数・計測方法は馬場ら(1986)にしたがった。計測はデジタルノギスを用いて0.1 mm単位まで行った。ソリハシコモンエビの生鮮

時の体色の記載は、KAUM-AT-155の生鮮時のカラー写真に基づく。本報告に用いた標本は、鹿児島大学総合研究博物館(KAUM)に保管されている。

■ 結果と考察

Urocaridella sp.

ソリハシコモンエビ (Fig. 1)

標本 KAUM-AT-155, 頭胸甲長5.4 mm, 鹿児島県大島郡与論島茶花港(27°03'01"N, 128°24'05"E), 水深0.1 m, 2012年10月22日, 西山 肇・岩坪洗樹。

記載 額角は頭胸甲長の1.65倍で、斜上方に伸びる。額角上縁に7歯あり、そのうち後方の3歯は頭胸甲上にある。最も後方にある額角上縁歯は頭胸甲背縁中央に位置する。額角下縁は10歯あり、付け根から先端まで短毛がある。頭胸甲の正中部は、最も後方にある額角上縁歯の後方で隆起が弱くなり、頭胸甲後縁付近で平滑になる。触覚鱗長は触覚鱗幅の4.08倍。触覚鱗後方の頭胸甲側面に1小棘がある。腹節の正中部は平滑である。尾節は第6節の0.76倍。尾節の背側縁に3対の小棘、末縁に2対の長い棘がある。歩脚はすべて左右相称である。

生鮮時の色彩は、体が白色(生時は透明)で、額角、第3腹節の背縁、および尾扇に赤色斑と白色斑がある。頭胸甲と腹節に赤色点がわずかに点在する。歩脚は赤色と白色の縞模様である。

分布 日本国外では、紅海、インド洋から西太平洋にかけて広く分布する(峯水, 2000; 加藤・奥野, 2001)。国内では八丈島、南日本の太平洋

Iwatsubo, H. 2013. Record of palaemonid shrimp (Decapoda) from Yoron-jima island, Kagoshima Prefecture, southern Japan. *Nature of Kagoshima* 39: 81-83.

✉ Graduate School of Fisheries, Kagoshima University, 4-50-20 Shimoarata, Kagoshima 890-0056, Japan (e-mail: k8878027@kadai.jp).



Fig. 1. Fresh specimen of *Urocaridella* sp. from Chabana Fishing Port, Yoron-jima Island, Kagoshima Prefecture, Japan (KAUM-AT-155, 5.4 mm CL).

沿岸、および琉球列島に分布する（亀崎ら、1988；奥野、1994；峯水、2000；加藤・奥野、2001；本報告）。そのうち八丈島と鹿児島県与論島からは、標本に基づく記録がある（奥野、1994；本報告）。

備考 ソリハシコモンエビは、八丈島、南日本の沿岸、および沖縄県で水中写真に基づく記録やダイバーによる観察例が報告されていた（亀崎ら、1988；奥野、1994；加藤・奥野、2001）。しかし、標本に基づく日本国内からの報告は、これまでに奥野（1994）による八丈島産の標本のみである。したがって、本報告は標本に基づく鹿児島県からの初記録である。

ソリハシコモンエビは、夜間に波打ち際付近まで遊泳してくることがあり（峯水、2000）、本調査で得られた本種は夜間に港の岸壁付近の水深約0.1 mを遊泳しているところを採集された。

Fujino and Miyake (1969) は、和歌山県から得られた1標本に基づき *Leandrites cyrthychus* を新種記載し、その後 Chace and Bruce (1993) は、本種が *Urocaridella* に帰属することを示した。かつて、本種はソリハシコモンエビとされていた（例えば亀崎ら、1988）。生時の斑紋パターンがソリハシコモンエビと異なるが、形態的に酷似する近縁種ベンテンコモンエビ *Urocaridella* sp. とミカヅキコモンエビ *Urocaridella* sp. が存在する（奥野、

1994）。エチルアルコールでの保存下では小型エビ類の標本は、生時の斑紋がほぼ完全に消失するため、ソリハシコモンエビ、ベンテンコモンエビ、およびミカヅキコモンエビのうちどの種が *U. cyrthychus* であるのかを検討するのは困難である。そのため奥野（1994）は、これら3種に適用すべき学名の検討には多数の標本を比較する必要がある、ソリハシコモンエビと *U. cyrthychus* とは別種である可能性があることを示唆した。本報告では奥野（1994）の見解にしたがい、ソリハシコモンエビ *Urocaridella* sp. とした。

■ 謝辞

与論島での調査・滞在に際して鹿児島大学与論活性化センターの高橋 肇氏、ヨロンダイビングサービスの竹下敏夫氏、与論町役場の龍野勝志氏をはじめ職員のみなさま、与論町商工会の岩村中里氏をはじめ職員のみなさま、国立科学博物館の松浦啓一博士、三重大学大学院生物資源学研究所の木村清志博士、笹木大地氏、日比野友亮氏、ならびに武内 俊氏、広島大学大学院生物圏科学研究科の木村祐貴氏、鹿児島大学魚類分類学研究室の吉田朋弘氏、ならびに田代郷国氏には多大なご協力をいただいた。鹿児島大学魚類分類学研究室の西山 肇氏には、与論島での調査・滞在でのご協力のほかに、標本採集に際して多大なご協力をいただいた。また、鹿児島大学総合研究博物館の本村浩之博士と福元しげ子氏には標本登録・整理などのご協力をいただいた。以上の諸氏に対して深く感謝の意を表する。

■ 引用文献

- Chace, F. A., Jr. and A. J. Bruce. 1993. The caridean shrimps (Crustacea: Decapoda) of the *Albatross* Philippine Expedition 1907–1910, part 6: superfamily Palaemonoidea. *Smithson. Contrib. Zool.*, (543): i–vii + 1–152.
- Fujino, T. and S. Miyake. 1969. On two new species of palaemonid shrimps from Tanabe Bay, Kii Peninsula, Japan (Crustacea, Decapoda, Palaemonidae). *Publ. Seto Mar. Biol. Lab.*, 17: 143–154.
- 馬場敬次・林 健一・通山正弘. 1986. 日本陸棚周辺の十脚目甲殻類. 日本水産資源保護協会, 東京. 336 pp.
- 亀崎直樹・野村恵一・浜野龍夫・御崎 洋. 1988. 沖縄海

- 中生物図鑑, 第8巻. 甲殻類 (エビ・ヤドカリ). 新星図書出版, 沖縄. 232 pp.
- 加藤昌一・奥野淳兒. 2001. エビ・カニガイドブック — 伊豆諸島・八丈島の海から —. TBS プリタニカ, 東京. 157 pp.
- 峯水 亮. 2000. ネイチャーガイド 海の甲殻類 初版. 文一総合出版, 東京. 344 pp.
- 奥野淳兒. 1994. ソリハシコモンエビとその近似種について — 最近の話題 —. 伊豆海洋公園通信, 5 (10): 4-5.